

「ボーナスと暮らし向きに関するアンケート調査」(2011年夏)の結果

当センターでは、2011年夏のボーナス予想や暮らし向きについて、千葉銀行各支店の来店客(1,000人)を対象にアンケート調査を実施し、その結果は次のとおりとなった。

概要

ボーナス予想額 :50万7千円(昨夏比、2万4千円減少(4.5%減))

今夏のボーナス予想額は50万7千円となり、昨夏の受取額(回答者の実績)を2万4千円下回った。したがって、国際的な金融危機の引き金となったリーマンショック後の2008年冬以降今夏まで、夏冬を通じて6季連続の前年実績割れを記録する結果となった。今夏の減少率は△4.5%で昨夏の減少率△5.2%に比べ減少幅は縮小したものの、低迷が続いている。

今回のアンケート調査は東日本大震災後まだ1ヶ月という国内全体が先行きの見えない混沌とした中での実施となった。未曾有の災害が伝えられる最中でもあり、ボーナス調査及び暮らし向き調査は、先々への不安から低調な回答となった。

一部の民間調査機関の調査では、震災前の妥結結果のデータではあるが、昨年からの企業業績のゆるやかな回復を反映し、今夏のボーナスは支給ベースで前年実績を上回るとの発表もある。しかし、県内一円の給与所得者を対象とした当センターの調査では、前年実績を上回れず、まだ先という回答結果になっている。

暮らし向きアンケート調査 「生活全般」について質問した結果

半年前とくらべて:

「変わらない」が7割以上を占め、暮らし向きに対する停滞感が根強い。

今後半年間の予想は:

先々に対して、現状より悪くなりそうの悲観的な回答が増加している。

直近半年間の暮らし向きについては、「生活全般」において前年夏の調査に比べ、「良くなった」5.0%(前年夏6.2%)であり、1.2ポイント悪化し、「悪くなった」も23.1%(前年夏21.0%)であり、2.1ポイント悪化し、生活全般の改善は見られない。「変わらない」も71.9%(前年夏72.9%)と7割以上を占め、暮らし向きに対する停滞感は依然として根強い。

また、先行き(今後半年間)の見通しにおいても、「良くなりそう」4.2%(現状5.0%)、「悪くなりそう」においては、38.6%(現状23.1%)と現状より15.5ポイントの悪化を予想しており、先々に対し厳しい回答を寄せている。

▽ボーナスの増減予想では、「増えそう」は7.2%(昨夏8.7%)と1.5ポイント減少し、「減りそう」は37.5%(昨夏36.7%)と0.8ポイント増加し、ともに前年に比べ、悪化となっている。依然として、「減りそう」が「増えそう」を30.3ポイントも上回っており、厳しい状況は続いている。

▽ボーナスの配分については、1位「貯蓄」、2位「ローン等の返済」、3位は「教育・教養」である。「貯蓄」は例年と同じく、36.9%と高い配分割合を示している。

▽貯蓄の内訳をみると、「銀行預金(財形貯蓄を含む)」84.7%、「ゆうちょ貯金」7.2%、「社内預金」4.9%、「株式・投信」1.7%の順となっている。順位も昨夏と同じで、銀行預金の堅調さが今夏も目立

っている。

▽貯蓄の目的は、1位「老後の備え」、2位「教育資金」、3位「不時の備え」が上位を占めた。以下「旅行レジャー」、「住宅関連資金」、「車の維持管理」の順となっている。

▽購入希望品目では、1位「婦人服」、2位「紳士服」、3位「家具・インテリア」が上位を占めた。既婚・独身を問わず男性は「紳士服」、女性は「婦人服」をそれぞれ1位にあげている。

調査結果

1 ボーナスの増減予想

—ボーナスの増減予想では、「増えそう」は7.2%（昨夏8.7%）と1.5ポイント減少し、「減りそう」は37.5%（昨夏36.7%）と0.8ポイント増加し、ともに前年に比べ、悪化となっている。依然として、「減りそう」が「増えそう」を30.3ポイントも上回っており、厳しい状況は続いている。—

この夏のボーナスは、昨夏に比べて、「増えそう」は7.2%、「減りそう」は37.5%、「変わらない」が55.3%となった。「増えそう」（昨夏8.7%）は1.5ポイント減少し、「減りそう」（昨夏36.7%）も、0.8ポイント増加し、共に悪化した。

03年冬以降、リーマンショック前の08年夏までは「増えそう」、「減りそう」は共にバブル崩壊後の低迷を乗り越え徐々に改善し、緩やかではあるが良化を続けてきた。しかし、リーマンショック後の08年冬以降悪化に転じ、大幅な改善を見ることもなく、今夏に至っている。

「増えそう」と「減りそう」の差も「減りそう」が依然として30.3ポイント上回っており、改善が望まれる。（図表-1、2）。

年齢別に昨夏の調査結果と比較してみると、「増えそう」は「50歳以上」を除く全ての年齢階層において昨夏比減の悪化の予想となった。「減りそう」も「50歳以上」を除く年齢階層において昨夏比増で、悪化を予想している。また、今夏の年齢階層別比較の特徴として、「50歳以上」が「増えそう」、「減りそう」とともに、昨夏より改善し、他階層が悪化する中、良化する結果となった。

なお、ボーナス予定日は、6月中が全体の58.1%（うち、上旬19.5%、中旬16.8%、下旬21.8%）で、7月中が30.3%である。

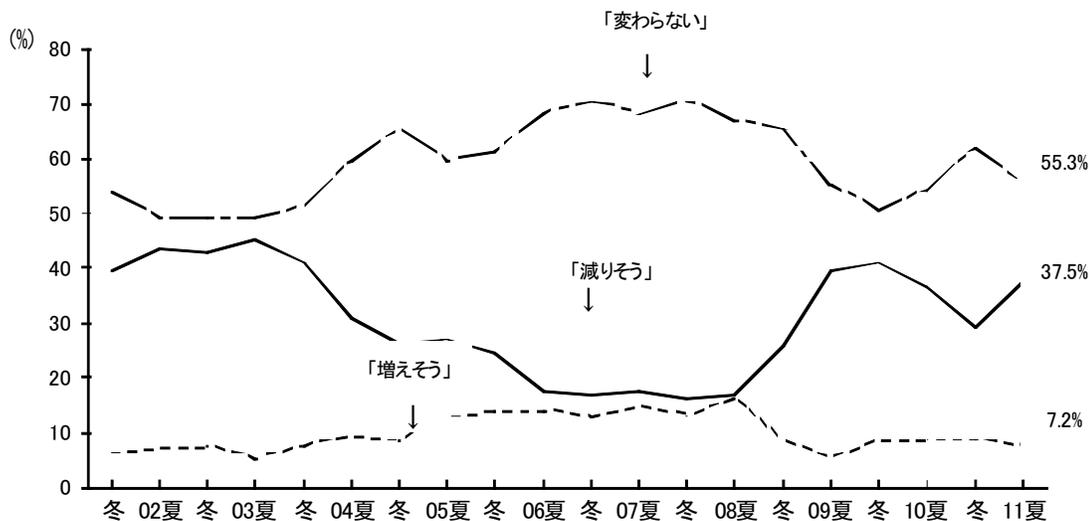
図表-1 ボーナスの増減予想（対前年比）

（構成比、単位：%）

	「増えそう」	「減りそう」	「変わらない」
平均 09夏	5.3	39.5	55.3
10夏	8.7	36.7	54.6
11夏	7.2	37.5	55.3
30歳未満 09夏	8.1	27.9	64.0
10夏	25.0	21.9	53.1
11夏	16.2	24.3	59.5
30歳代 09夏	9.4	40.0	50.6
10夏	11.5	33.8	54.7
11夏	9.2	36.6	54.2
40歳代 09夏	3.1	42.0	54.9
10夏	3.4	39.2	57.4
11夏	2.9	46.6	50.5
50歳以上 09夏	1.4	42.4	56.1
10夏	1.5	46.7	51.8
11夏	4.8	35.7	59.5

注) 不明、無回答を除いた構成比

図表-2 ボーナス増減予想割合の推移



2 ボーナスの予想額

—今夏のボーナス予想額は50万7千円となり、前年の受取額(回答者の実績)を2万4千円下回った。したがって、リーマンショック後の 2008年冬から今夏まで、夏冬を通じて6季連続の前年実績割れを記録する結果となった。—

ボーナスの予想額(回答者の平均、税引き後の受取額)は50万7千円で、前年比4.5%減(回答者の前年実績比)となった。前年の受取額を 2万4千円下回る回答である。今夏の調査は東日本大震災直後の調査となり、未曾有の国難に直面している最中、質問に対する回答もマイナス方向に向きがちであった。震災前の県内景気は国内景気同様、足踏み状態を脱し、持ち直しの動きがみられた。企業収益も合理化等が奏功し、業況は堅調に推移し、個人消費も減少幅は縮小し回復してきていた。しかし、本調査では、今夏も前年実績を上回ることができなかった。リーマンショック後の 2008年冬から今夏まで、夏冬を通じて6季連続の前年実績割れを記録することになった。

—昨年の夏(09年夏)の減少率は△6.0%で本調査開始以来、夏のワースト1位であったが、昨夏(10年夏)に続き今夏も減少幅は縮小している。

今夏のボーナスアンケートは企業業績の持ち直しが伝えられ、昨夏比において増加が期待された

図表-3 ボーナス予想額・予想伸び率

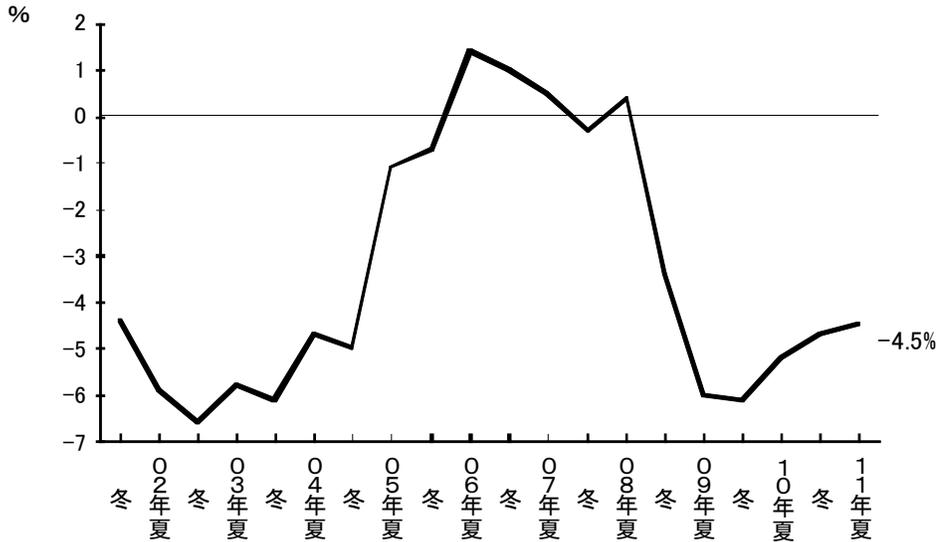
		予想額 (万円)	予想伸び率 (対前年夏、%)
平均		50.7	△ 4.5
30歳未満		34.7	3.0
30歳代		43.5	△ 3.3
40歳代		54.9	△ 6.8
50歳以上		63.3	△ 5.5
勤務地別	県内	46.6	△ 4.5
	東京	65.6	△ 4.1

が、県内の給与所得者のボーナスは、震災ショックも影響し、厳しさが続いている(図表3、4)。

本調査は年齢階層別にも集計しているが、今夏は「30歳未満」のみが昨夏比において増加した。他の全ての階層は昨夏の実績を下回り、特に「40歳代」は6.8%減と他階層に比べ減少している。

また、県内・都内の勤務地別に見ても、共に前年実績を下回り、厳しさを共有している。

図表-4 ボーナス予想伸び率の推移



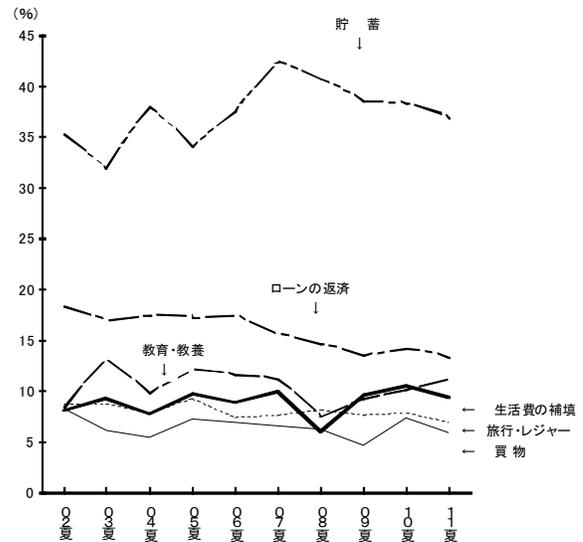
3 ボーナスの配分予定

——ボーナスの配分については、1位「貯蓄」、2位「ローン等の返済」、3位は「教育・教養」である。「貯蓄」は例年と同じく、36.9%と高い配分割合を示している。

ボーナスの配分予定は、1位「貯蓄」(36.9%)、2位「ローン等の返済」(13.3%)、3位「教育・教養」(11.2%)で、以下「生活費の補填」、「旅行・レジャー」、「買物」の順となっている。配分順位は1位「貯蓄」、2位「ローンの返済」は不動で変わらず、昨夏3位の「生活費の補填」が4位へ順位を下げ「教育・教養」と順位が入れ替わった。中でも、「貯蓄」は景気の上下にあまり関係なく常にトップであり、今季も全体の36.9%を占めている(図表-5、6)。

既婚・独身、男・女別でみると、既婚・独身を問

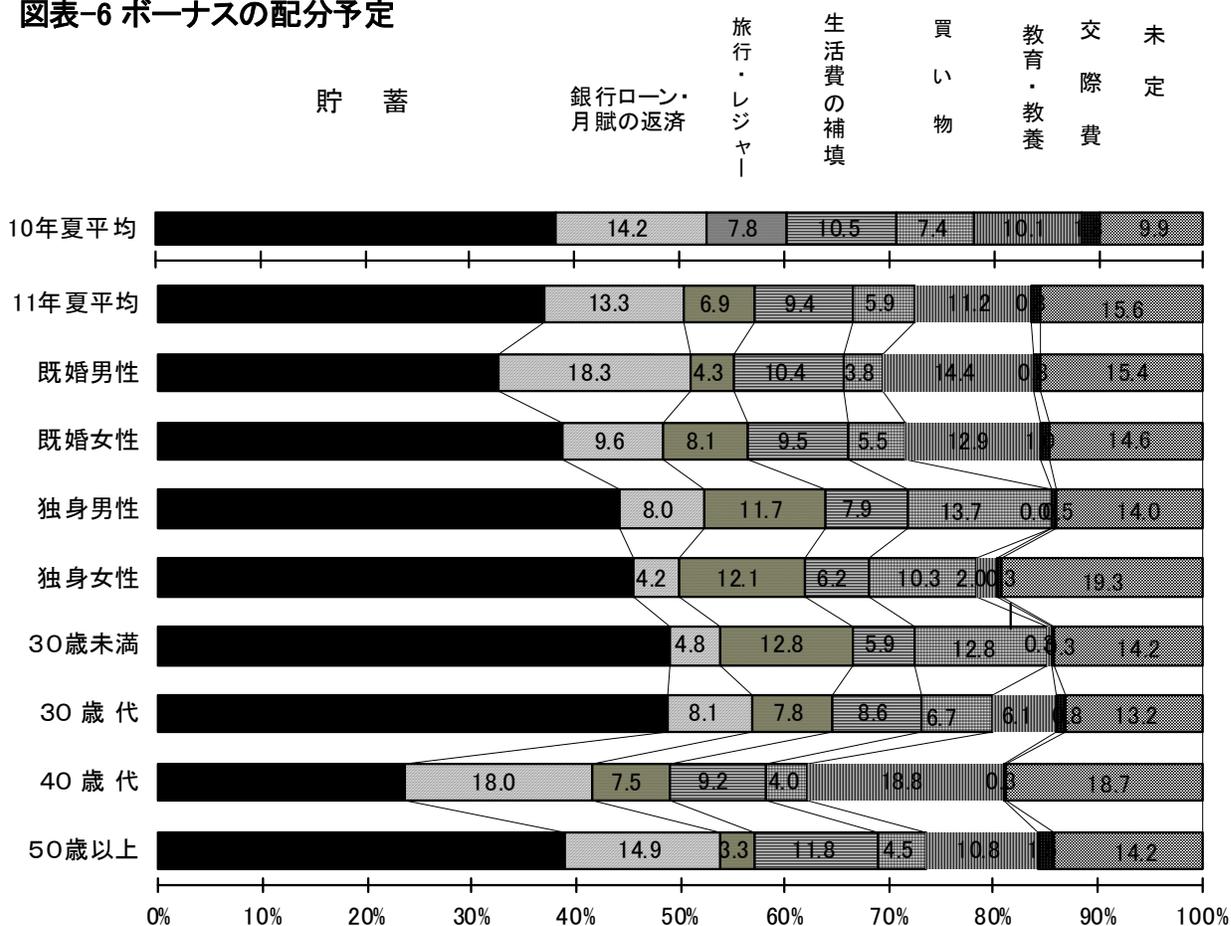
図表-5 ボーナスの配分予定の推移



わず、まず「貯蓄」に回すと答えている。なかでも独身者は男性、女性ともに貯蓄志向が高く、男性は44.2%、女性は45.6%を貯蓄に回すと回答している。独身者の意外な堅実性が見て取れる。「貯蓄」以外の項目では、独身者は既婚者に比べて「旅行・レジャー」や、「買い物」のウェイトが高く、既婚者は独身者に比べて「ローン等の返済」、「教育・教養」、「生活費の補填」に高い割合を占め、独身者と既婚者のそれぞれの特徴を表わしている。

年齢別でも、全ての年齢層において、「貯蓄」が一番の配分となっている。特に、「30歳未満」(48.9%)と「30歳代」(48.7%)は貯蓄意欲が高い。「貯蓄」以外の年齢階層による特徴としては、30歳未満の年齢層が「旅行・レジャー」、「買い物」に、40歳代は「教育・教養」、「ローン等の返済」に、50歳以上は「生活費の補填」において、他の年齢層に比べそれぞれ配分割合が高くなっている。

図表-6 ボーナスの配分予定



4 貯蓄の内訳

—貯蓄の内訳をみると、「銀行預金(財形貯蓄を含む)」84.7%、「ゆうちょ貯金」7.2%、「社内預金」4.9%、「株式・投信」1.7%の順となっている。順位も昨夏と同じで、銀行預金の堅調さが今夏も目立っている。—

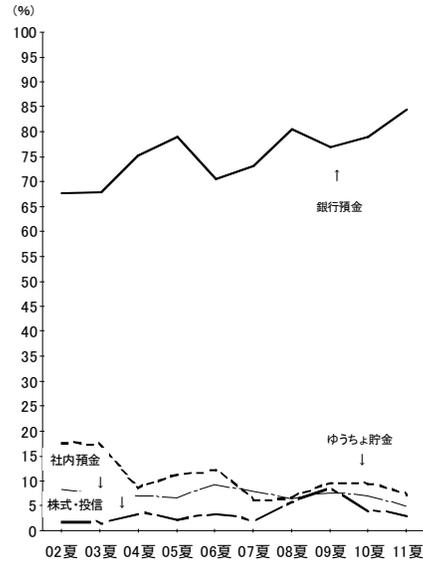
貯蓄の内訳は、「銀行預金(財形貯蓄を含む)」84.7%、「ゆうちょ貯金」7.2%、「社内預金」4.9%、「株式・投信」1.7%の順となっている。この順位は昨夏と同じである。(図表-7、8)。

貯蓄の内訳を、既婚・独身、男・女別で見ると、いずれも「銀行預金」の割合が一番高い。その中でも既婚女性は88.4%で高い割合を示している。「銀行預金」以外では、「ゆうちょ貯金」は独身男性(13.6%)、「社内預金」も独身男性(15.7%)、「株式・投信」は独身女性(4.3%)とそれぞれ高い関心を示している。

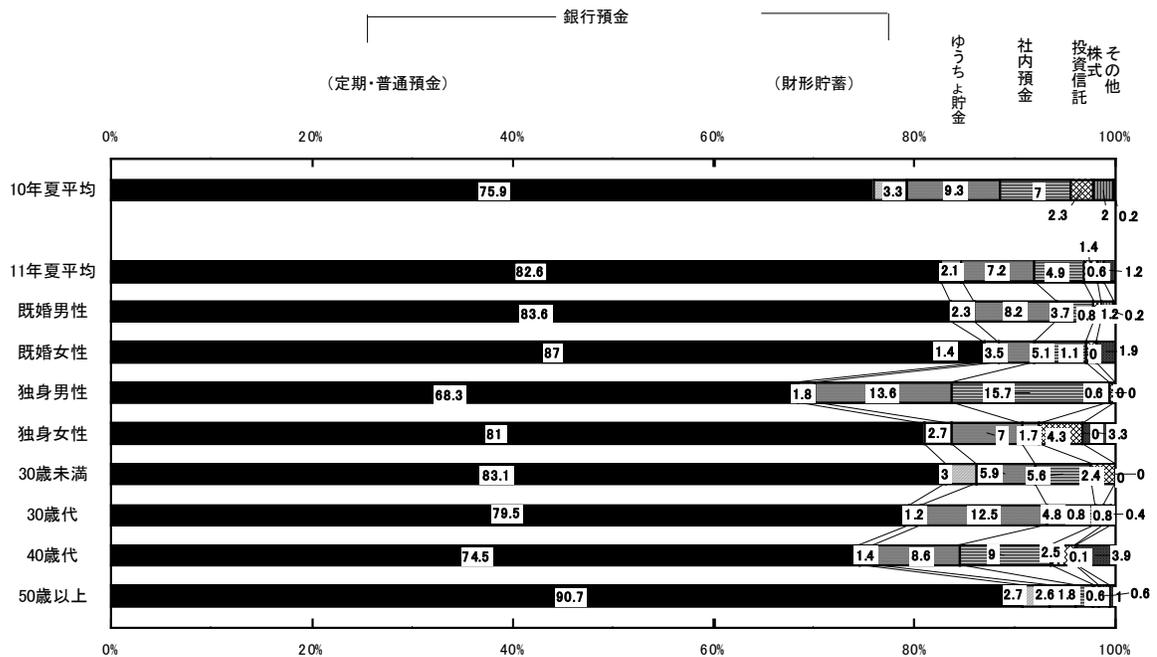
年齢別でも、各年齢層で「銀行預金」の割合がトップであり、貯蓄全体の中で占める割合が高い。特に50歳以上は93.4%と他の年齢層より高い割合となっている。

また、「銀行預金」以外では、30歳代が「ゆうちょ貯金」(12.5%)、40歳代が「社内預金」(9.0%)にそれぞれ他の年齢層より高い支持を得ている。

図表-7 貯蓄の内訳推移



図表-8貯蓄の内訳



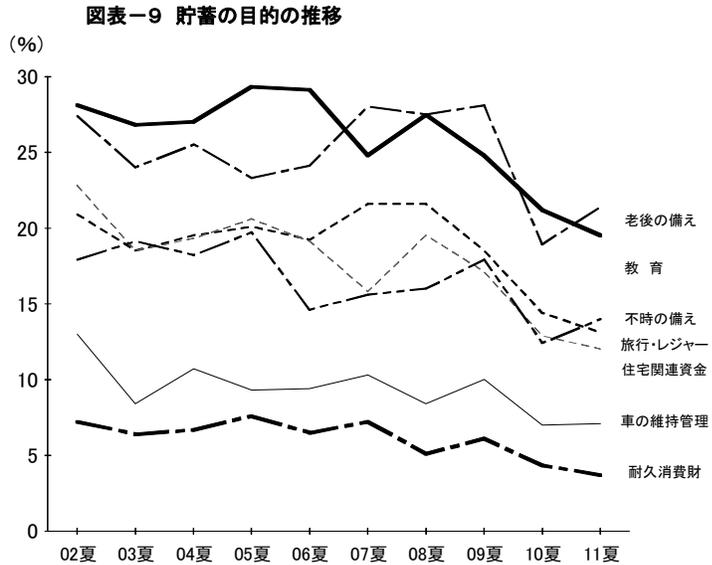
5 貯蓄の目的

—貯蓄の目的は、1位「老後の備え」、2位「教育資金」、3位「不時の備え」が上位を占めた。以下「旅行レジャー」、「住宅関連資金」、「車の維持管理」の順となっている。—

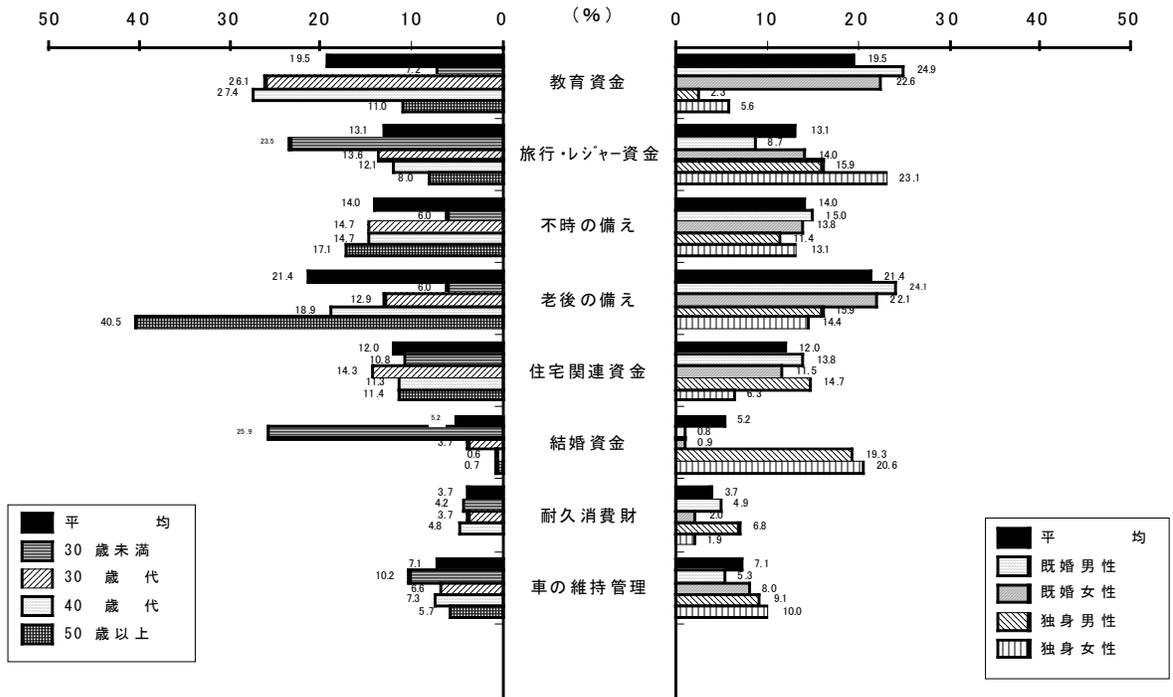
貯蓄の目的（複数回答）は、「老後の備え」21.4%が昨夏1位であった「教育資金」19.5%を上回り1位となった。つづいて3位「不時の備え」14.0%の順となった（図表-9）。

年齢別にみると、30歳未満は「旅行・レジャー」（23.5%）、「結婚資金」（25.9%）、30歳代は「住宅関連資金」（14.3%）、40歳代は「教育資金」（27.4%）、耐久消費財（4.8%）、50歳以上は「老後の備え」（40.5%）、「不時の備え」（17.1%）が、他の年齢層に比べそれぞれ高く、各年代のライフスタイルの相違が表われている。

既婚・独身、男・女別では、既婚者は「教育資金」（男性の24.9%、女性の22.6%）、「老後の備え」（男性の24.1%、女性の22.1%）を、独身者は、「結婚資金」（男性の19.3%、女性の20.6%）、「旅行・レジャー」（男性の15.9%、女性の23.1%）を貯蓄目的にあげている（図表-10）。



図表-10 貯蓄の目的(複数回答)



6 購入希望品目

—購入希望品目では、1位「婦人服」、2位「紳士服」、3位「家具・インテリア用品」が上位を占めた。既婚・独身を問わず男性は「紳士服」、女性は「婦人服」をそれぞれ1位にあげている。—

ボーナスで買いたいもの(複数回答)は、「婦人服」(12.8%)、「紳士服」(7.8%)、「家具・インテリア用品」(7.5%)の順となった(図表-11)。

既婚・独身、男・女別では、既婚・独身を問わず、男性は「紳士服」、女性は「婦人服」を1位にあげている。

昨夏2位の「テレビ」が今夏は全体で4位と順位を下げた。地上波対応テレビへの買い替えがほぼ終息してきていることがうかがえる。その他順位を上げた品目として「家具・インテリア用品」(4位→3位)、パソコン(8位→4位)、乗用車(11位→8位)があげられる。

図表-11 購入希望主要品目

(複数回答、単位:%)

全 体				既 婚 男 性		既 婚 女 性	
	09夏	10夏	今夏				
婦 人 服	10.2	11.9	12.8	紳 士 服	10.9	婦 人 服	15.0
紳 士 服	8.2	7.6	7.8	テ レ ビ	9.7	家 具 ・ イン テ リ ア	8.3
家 具 ・ イン テ リ ア	6.2	6.9	7.5	家 具 ・ イン テ リ ア	8.5	子 供 服	7.5
テ レ ビ	12.6	10.1	7.4	子 供 服	8.5	テ レ ビ	6.3
パ ソ コ ン	6.5	4.8	6.6	パ ソ コ ン	7.9	パ ソ コ ン	5.8
子 供 服	5.3	5.3	5.6				
靴・ハンドバッグ	3.6	6.2	5.1	独 身 男 性		独 身 女 性	
靴	3.6	6.2	4.8	紳 士 服	17.0	婦 人 服	26.9
乗 用 車	3.2	3.3	3.9	パ ソ コ ン	13.8	靴・ハンドバッグ	13.4
冷 蔵 庫	2.8	1.7	3.3	靴	7.4	靴	11.3
ル ー ム エ ア コ ン	2.5	2.4	3.3	カ ー 用 品	7.4	化 粧 品	7.0
				家 具 ・ イン テ リ ア	6.4	テ レ ビ	5.9

7 暮らし向きについて

—暮らし向きアンケート調査の「生活全般」については、半年前と比較して悪化傾向にあり、「変わらない」が7割以上を占め、依然として暮らし向きの停滞感が根強い。今後半年間の予想も現状より悪くなるとの悲観的な回答が多い。—

(1) 収入

半年前と比べ、「増えた」が9.5%(前年8.7%)で0.8ポイント増加し、良化した。しかし「減った」は30.8%(前年28.7%)で、2.1ポイント増加し、悪化している(図表-12)。

半年後の先行きについては、「増えそう」は5.4%(現状9.5%)と、悪化の予想である。また、「減りそう」も38.7%(現状30.8%)と先々の収入への不安をのぞかせている。

(2) 支出

半年前と比べ、「増やした」は17.2%(前年19.1%)と1.9ポイント減少している。また、支出を「減らした」との回答割合は25.0%(前年23.9%)で、1.1ポイント増加し家計支出は縮小傾向にある。

また、半年後の先行きについても、「増やす」は7.5%（現状17.2%）と現状より9.7ポイント減少し、「減らす」との回答が41.1%（現状25.0%）と現状より16.1ポイント増と、今後の家計消費支出に対する緊縮姿勢が見てとれる。

(3) 生活全般

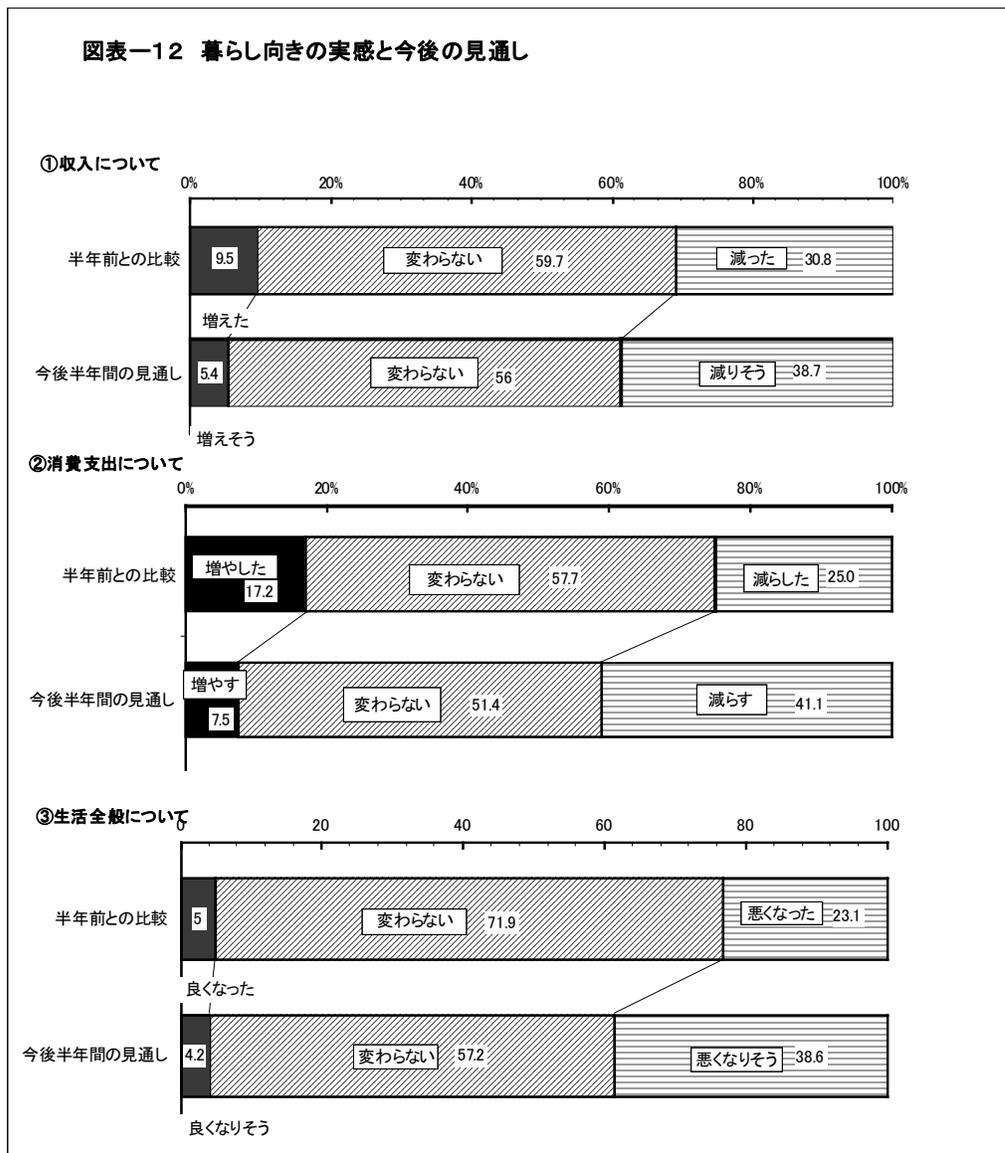
「生活全般」において、直近半年間の暮らし向きについては、「良くなった」は5.0%（前年6.2%）と減少し、「悪くなった」が23.1%（前年21.0%）と増加し、暮らし向きは総じて悪化に転じている。

しかし、半年後の先行きの見通しとなると、「良くなりそう」が4.2%（現状5.0%）で0.8ポイントの減少、「悪くなりそう」が38.6%（現状23.1%）と現状より15.5ポイント増加し、ともに悪化を予想している。

「収入」、「消費支出」、「生活全般」のどの切り口からみても、悪化傾向にあり、先行きへの生活不安は拭かれていない。

今夏の県内の給与所得者を対象とした本調査の結果では、「ボーナスの所得水準」、「暮らし向き」ともに、厳しい回答が寄せられた。震災前、県内の企業業績は全体として、ゆるやかながら回復の足取りを示していた。この震災という足かせがその動きを止め、大きな景気後退につながらないことを願いたい。

(坂口 修治)



回答者の構成

(人)

	30歳未満	30歳代	40歳代	50歳以上	計
既婚男性	17	65	134	136	352
既婚女性	10	73	97	77	257
独身男性	47	21	9	9	86
独身女性	74	27	21	5	127
計	148	186	261	227	822

アンケート調査実施要領

①方 法	千葉銀行への来店客を対象として、ロビーにて実施
②実 施 日	2011年4月12日～14日
③対 象 地 域	県内全域
④対 象 人 員	1,000人
⑤有効回答数	822人
有効回答率	82.2 %